

サクラソウの保護活動

群馬県立勢多農林高等学校 植物バイオ研究部

1 はじめに

サクラソウは、北海道から鹿児島県まで広く分布している。わが国では、江戸時代より園芸品種が数多く育成され、人気のある山野草である。その一方で、園芸目的の採集や自生地の開発などによって、絶滅の危機に瀕している。群馬県赤城山のサクラソウは、盗掘や鳥獣害の被害が原因で絶滅したと思われていたが、平成13年に再発見された。植物バイオ研究部では、群馬県自然保護連盟からサクラソウの保護を依頼され、平成13年より保護活動に取り組んでいる。

2 自生地での保護活動

(1) 環境整備活動

サクラソウの自生地の多くは、火入れや放牧、草刈りなどの人間の活動によって維持されている半自然植生である。現在では、人による管理がされず、サクラソウの生息地が失われつつある。そこで、自生地での下草刈りを実施することとした。



自生地付近で繁茂が目立つ、ミヤコザサを中心として下草刈りを行っている。日当たりを妨げる木立の間引きについては、国有林のため群馬森林管理署の森林官の方に立ち合ってもらい許可を得て慎重に行っている。

(2) 自生地調査

自生地での環境整備活動により、徐々に株数が増加する傾向にある。さらに、鉄砲水が原因と思われる流出株が多く見られる場所が発見されており、赤城山全体の株数が徐々に増加していると考えられる。しかし、盗掘の被害は多発しており、盗掘を防ぐことができれば、一層、株数の増加が見られるだろう。そこで、「サントリー天然水の森 赤城」100年の森協議会の方々のご支援により、勢多農モデルの保護柵を設置した。流水による株の移動にも対応できる構造となっている。成果として、各群落の株数が増加し、広範囲で流出株が発見された。勢多農モデルの保護柵が有効であることが確認できた。



3 遺伝的多様性の解析

サクラソウは異型花柱性の植物で、雌しべが長く雄しべが短い長花柱花と、雌しべが短く雄しべが長い短花柱花が1:1の割合で存在すると言われている。しかし、赤城山の自生地は短花柱花のみの群落である。



そこで、筑波大学生命科学研究科との共同研究で、遺伝子解析をすすめ、自生地の遺伝的多様性を把握する研究を行っている。この共同研究の中で、遺伝的多様性が他の地域に比べて極めて乏しく、長花柱花がないことが問題点としてあがった。これらを解決するために、自生地付近での聞き込み調査、DNA 解析に取り組んでいる。

4 サクラソウ種苗生産技術の確立

盗掘を防ぐため、組織培養技術により大量増殖し、安価で販売することで、希少性を緩和する活動を行っている。

種子は自生地のサクラソウを保護している方に提供していただいた。無菌播種により得られた植物体を大量に増殖させ、外環境に出す「順化」を行い苗を生産した。一連の種苗生産技術を確立し、年間 3,000 鉢生産が可能となっている。



5 サクラソウ苗の販売と環境保全の呼びかけ

私たちが生産したサクラソウを、毎年様々な行事で販売している。販売に際しては、サクラソウについての理解を深めてもらうため、盗掘防止や環境保全を呼びかけている。地域と密着した活動は、盗掘からサクラソウを守る活動として期待されている。



6 関係諸機関との連携強化

私たちは、関東森林管理局や地元渋川市、財団法人日本鳥類保護連盟などの団体等との連携を深めている。サントリーとの植樹祭をはじめ保護柵設置など、多くの人々の力があって、私たちの活動が成り立っている。保護活動の動きは、行政を大きく動かし、サクラソウ自生地を横断する予定だった林道の迂回を実現することができた。

7 おわりに

サクラソウのような目立ちやすい植物を象徴種として保護することで、それに関わる全ての生物を保護できる。サクラソウの美しさや魅力によって、赤城山の自然、その保護をアピールできる植物だと考えている。

私たちは今後も群馬県の象徴である赤城山の素晴らしさ、美しさを後世に伝えていけるよう全力で保護活動に取り組んでいきたい。

キーワード

サクラソウ、絶滅危惧、赤城山、環境保全、半自然植生、異型花柱性、遺伝解析
希少性の緩和、象徴種